

## 2021 年度 横浜商科大学地域貢献協働事業 研究成果の概要

研究課題名 子育て支援・土曜日プロジェクト

研究代表者 教授 東風 安生

### <プロジェクトの背景>

2021 年度からスタートした事業である。少子化社会において子育て支援は喫緊の課題である。横浜市鶴見区に位置する本学つるみキャンパスの近隣には多くのマンションやアパートが立ち並ぶ。就学前の幼児や小学生も多い。3 世帯住宅があまり見られない。若い保護者は自身も働き子育てをしていると想像する。しかし、コロナ禍の現在どのように子育てをしているか見えにくい。そこで教職センターと言う高等教育機関を設けている本学が子育て支援に悩み苦しむ若い世代の親を支援できたらよいと考えた。事業名を子育て支援・土曜日プロジェクトとした。親が子育て相談をしている間、子供たちは学生と共にキャンパスで、昔からの伝承遊びをして過ごす。子どもとの遊び体験は、将来教職に就きたいと考える学生にとってはまたとない機会となる。伝承遊びは、雨でも晴天でもできる。レパトリーがあり安全でもある。子育て相談をしている約 90～120 分の間に保護者は日々の悩みから解放された時間を設けることで、地域貢献の役割が果たせると考えた。

### <プロジェクトの具体的な内容>

第一に、学生にとっての学びの場をつくる。2021 年 4 月に本学東風ゼミで本事業の説明を行い学生アルバイトの募集をかける。決まった学生とともに、つるみキャンパス近郊のマンションやアパート、区役所や図書館などに掲示するポスターを考え、作成し、掲示する。チラシも一緒に作成し、必要に応じて配布する。令和 3 年 6 月 1 日～12 月 31 日までの半年間、毎週土曜日の午前中に、子育て支援の相談を実施する。予約をあらかじめメールで取り、それに応じて、学生のシフトを組む。学生は午前 9 時～12 時までの 3 時間を拘束する。子育て支援の相談は、1 回の土曜日に 1 件、10 時～11 時 30 分実施する。

親子で子育て相談のメリットは、子どもを一人にできない保護者やどこかに連れて行き遊んでもらえる機会を探している保護者にとって本学のキャンパスで遊んでくれる大学生がいることは魅力的である。また大学の教員が、子育ての相談にのってくれることは大変に信頼でき、一方で個人情報や学校関係者や近所づきあいで他人に漏れることもない。事業責任者は、相談については守秘義務を守り、あくまでその時間のセッションだけのアドバイスとなる。継続して子育て相談をしたい場合は、あらためて相談予約をとる。保護者との相談の過程で他機関との連携が必要だと感じた場合は、できる限り早急に、本事業責任者から大学を通じて、協働事業者である横浜市鶴見区福祉保健センターこども家庭支援課様に連絡をする。

### <プロジェクトの成果と今後の課題>

表 1 子育て相談を実施した家庭

学生にとっての学びの場 ゼミの学生に事業の紹介をして、東風ゼミ 3 年 男子学生 1 名を選出した。自主的に応募してきた彼と大学との間でアルバイト契約を結んだ。応募理由は、自宅近所に住む小学生の従弟 2 名とよく遊んでいて慣れているからとのこと。町内会（東寺尾南部明朗町会 齋藤様）のご協力を得て、子育て支援のチラシを 10 枚程度 町内の掲示板に貼らせてもらった。大学総務課にも依頼し、正門前掲示板にもチラシを 12 月まで掲示した。結果的に 2 つの家庭からの連絡があった。（表 1 参照）

|      | 家庭 1           | 家庭 2                 |
|------|----------------|----------------------|
| 相談者  | A さん（父親）       | B さん（母親）             |
| 実施回数 | 1 回            | 7 回                  |
| 相談方法 | オンライン          | オンライン                |
| 備考   | 母は留守。子は途中から参加。 | 娘と学生アルバイトがオンライン上で遊ぶ。 |

相談内容については相談者側の個人情報になるのでここで紹介はできない。ただし、オンラインの実施でのみになってしまった。学生については、家庭 2 について合計 7 回の相談の機会があったが、そのうちの 5 回目に参加した。オンラインの画面上で、入学前の幼稚園年長組の女兒と、手をたたいたり、「あっち向いてホイ」というゲームをしたりして遊んだ。この様子を、母親はスマートフォンでオンラインに入室してその様子を見ていた。母親と筆者との会話は、女兒の様子をふりかえりながら非常に話がはずんだ。今後は、学生のこうした参加の機会を対面式でも増やしていくことで、親も相談しやすくなると想像する。また地域から見た大学の壁というものを低くする機会になっていくと考えている。